

中世の土豪と村

——西岡家系図を中心に——

藤井直正

一 は し が き

紀ノ川がゆるやかに流れる紀北と、高くけわしい山々がそびえ、海岸に黒潮の打ち寄せる紀南、この二つの地域をいだけ紀伊国の歴史は、遠く原始時代にはじまり、その自然を舞台として、さまざまのドラマがくりひろげられて来た。

紀ノ川は、源を大和国吉野郡に発し、和泉山脈のふもとに広大な河岸段丘を形づくりながら大阪湾にそそいでいる。古代には、この紀ノ川に沿って、大和から淡路島を経て四国に至る南海道が通じ、沿岸には、東から伊都(いと)・那賀(なが)・名草(なくさ)・海部(あま)の四郡がおかれていた。

こうした地形から見られるように、紀ノ川の流域は、古代・中世において、大和と南海道諸国を結ぶ交通路として重要な役割を果たして来た。記紀その他の古典に見える数かずの伝承や、日前・国懸ひのくま くにかかす両神宮(1)の存在、五々六世紀の外交に活躍した紀氏に関連する大谷古墳(2)・岩橋千塚(3)の分布など、この国の古代史をいろどる伝承や遺跡が、紀ノ川下流域地域に集中している。また、紀伊国府が現在の和歌山市府中におかれ、紀伊国分寺が那賀郡打田町に、国分尼寺が同岩出町にそれぞれ位置していることも、律令制度下におけるこの地域の重要性を物語るものであろう。

紀ノ川にのぞんで、その北岸に岡田という集落がある。現在の行政区画では、和歌山県那賀郡岩出町大字岡田であるが、古くは、岡田村とよばれていた。

中世の土豪と村

中世の土豪と村

江戸時代に、紀州藩によって編さんされた『紀伊國續風土記』には、

岡田村 遠迦駄

田畑高 千百九十五石三斗九合

家数 五十六軒

人数 二百九人

溝川村の東三町許にあり、此地土地高く地形岡田の名に應ぜり、此村岩出ノ荘に入れとも産土神他村と別なるをみれば舊は岩出ノ荘にあらざるなるへし

と記されている。

ところで、この岡田に西岡家という旧家がある。江戸時代あるいはそれ以前からの家系で、旧幕時代には庄屋役をつとめ、紀州藩主のお成りもあつたと言ひ伝えられているが、西岡家には一巻の系図がのこされている。平安時代からはじまり、現代に及ぶ長いものである。この系図の信憑性についての問題は後に触れるとして、そこに記されていることがらによって西岡家の系譜と家の歴史がたどれるばかりでなく、岡田村の成り立ちを考える上に重要な事項が記載されている。

本稿では、この『西岡家系図』を史料として紹介しながら、そこに記されている伝承を中心に、西岡家と岡田村の歴史を解明すると共に、中世における村落の成立について一つの考察を試みたいと思う。

- (1) 和歌山市秋月にある。
- (2) 和歌山市大谷、紀ノ川の北岸にある。全長約七〇㍎の前方後円墳で、大陸的色彩の濃い馬具類が出土し、紀氏関係の古墳と考えられている（『大谷古墳』和歌山市教育委員会、昭和三四年）。
- (3) 和歌山市岩橋、高さ一三〇㍎をはかる前山の山頂と山腹に数基の前方後円墳と数百基の円墳から成る大古墳群である。現在「紀伊風土記の丘」として整備され史跡公園となっている（関西大学考古学研究室『岩橋千塚』、昭和四二年）。

二村の素描

江戸時代に紀伊国那賀郡岡田村とよばれた村落は、現在の和歌山県那賀郡岩出町大字岡田である。

和歌山市から粉河・橋本・五条を通過して大和王寺に至る国鉄和歌山線が紀ノ川の鉄橋を渡ると「岩出」駅に着く。ここから踏切を越えて国鉄二十四号線を東へ約〇・七^キ、途中、溝川の集落を過ぎ、春日川に架る岡田橋の手前から北側につづく集落が岡田である。紀ノ川の形成した河岸段丘上に立地し、北から南に向かって傾斜する台地状の地形で、標高三〇^ミ前後をはかる(第1図)。

この岡田の集落をふくむ岩出町は、古くから那賀郡の中心で、大字清水には、かつて郡役所がおかれていた。明治四十一年八月には早くも町制が施行されているが、この旧岩出町は「岩出荘」の地域で十一カ村から成っていた。昭和三十一年に隣接の山崎村・根来村・上岩出村と小倉村の一部を合併し、現在では面積四二・八^キ、人口二〇、三〇〇人を擁している。

岡田村の歴史を考えるのに先立って、岩出町の歴史を概観しておこう。まず、吉田東伍博士の大著『大日本地名辞書』には、次のように記されている。

岩出 岩出村は大字清水^{シミズ}を以て駅所とし、今本郡衙を置かる。和歌山市の東四里、紀之川の北岸に臨む、歌名所なる岩手里は此なりと云ふ、摂津国にも同地名あり。

(中 略)

中世には岩手庄と呼び、八雲御抄宗祇国分等には岩手里を紀伊国としたり。

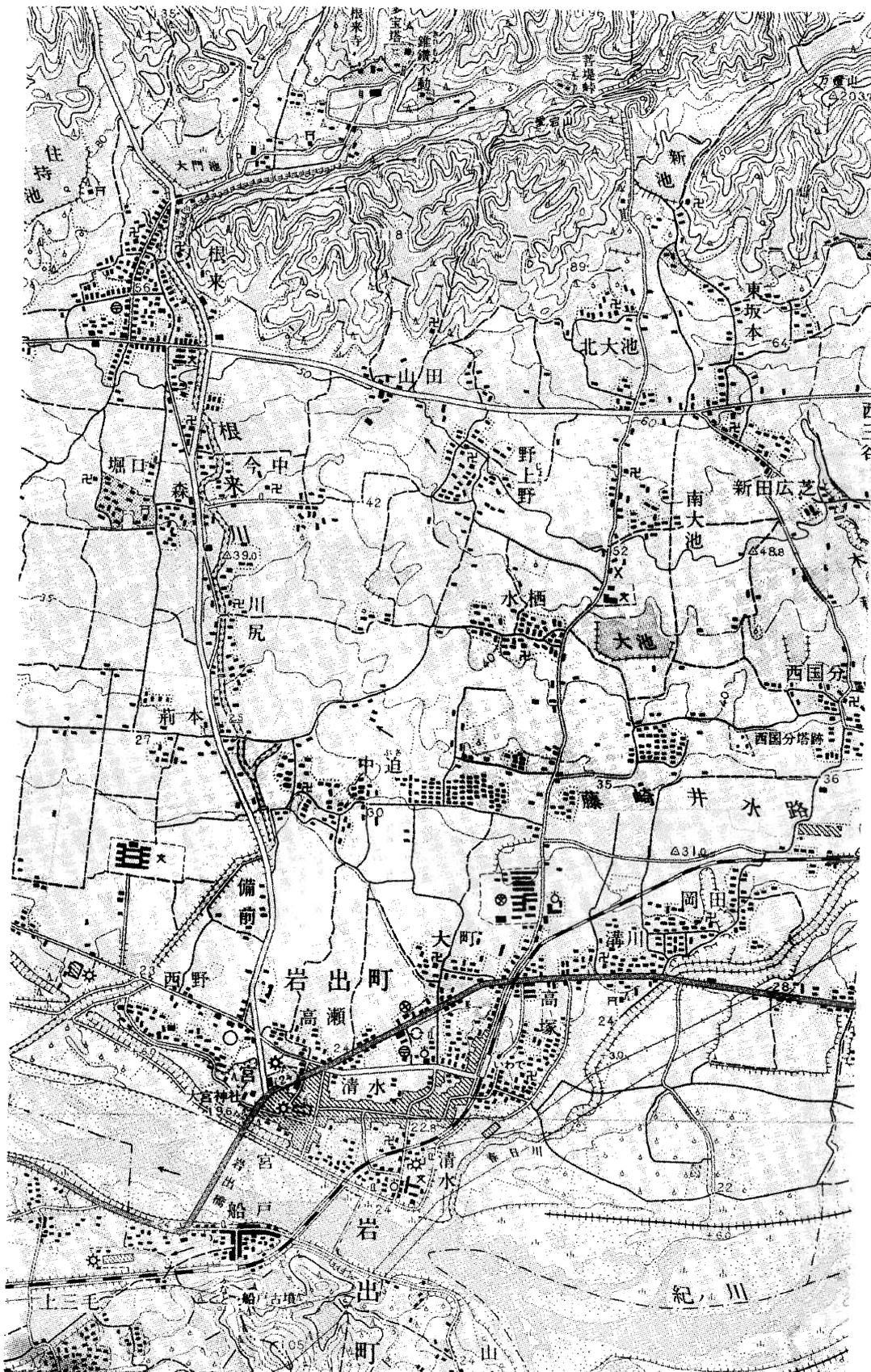
(後 略)

中世に「岩手庄」とよばれていたことが知られるが、これを『荘園史料』で見ると、

石手荘、大治四年、僧覺鑿、郡中石手村を以て、高野山傳法院領と為さむことを請ふ。遂に院領七所の一となる。貞応元年、関東令して、其の地頭職を置くを停む。今郡中荆本・中迫・備前・西野・高瀬・宮・清水・大町・高塚・溝川・岡田十一村を岩出荘といふ。

と記されていて、この石(岩)手荘が、僧覺鑿^{かくばん}の創立した大傳法院(根来寺^{ねらい})の所領であったことが知られるのである。大傳法院、通称根来寺の

中世の土豪と村



第1図 岡田村の位置 (1/25,000地形図「岩出」「丸柄」)

ことについては後述する。

また、江戸時代につくられた紀伊国の地誌『十寸穂の薄』下、那賀郡の項に、

磐手の里、清水經の淵大宮號總社「岩出總社權現祠元亨釋書に載」三部明神の祠神事八月晦の夜丑の時榊渡御供奉の人遠近群集す載元亨釋書と記されている。莊の中心は、この記に見える総社すなわち大宮神社のある宮の集落であったと考えられる。現在では、「岩出」と書いているが、もとは「岩手」「石手」「磐手」などとよばれていたようである。

三 西岡家系図とその伝承

すでに記したように、和歌山県那賀郡岩出町岡田、旧幕時代の那賀郡岡田村に「西岡」を名乗る旧家がある。現在、岡田には西岡を姓とする家は数軒あるが、その総本家である西岡家は、村の西端に南北に通ずる道に面して、長屋門と土塀に囲まれた屋敷地をのこし、旧家としての風格を見せている。『紀伊國續風土記』の岡田村の項の末尾には、

○舊家 西岡文次郎

家傳にいふ其祖を西岡左衛門佐長頼といふ菅原家の末流なり。故ありて浪士となり、城州相良郡西岡郷（ついで）に居る。元弘年中 後醍醐帝笠置に潜幸のとき 官軍に屬す。南北和平の後、子孫西岡大學資基といふ者當村に來り住す。其子を菅太郎資光といふ。莊中に菅神社を草創せり。天正年中子孫左衛門太郎資村といふ者、鈴木重幸に屬す。其後根來の一亂に泉州千石堀に於て戰死す。其子を彌三郎資勝といふ。所領に放れて農民となる。子孫代々當村に住す。（訓点筆者）

という記述があり、この家の由来を伝えている。

さて、西岡家（当主、西岡寿富氏）に伝えられている系図は、桐箱におさめられ、天地一五形、長さ約六尺の巻物に仕立てられている。先に引用した『紀伊國續風土記』の文の冒頭に「家傳」とあるのがこれに当たるのである。とくに標題は付けられていないが、仮に『西岡家系図』とよぶことにしたい。この一巻の系図がいつごろ作成され、現在に伝えられて来たのかについては明確ではないが、通覧して見ると、幕末の資信の代までとそれ以後では料紙も筆跡も異っているから、ここまでは幕末に筆写されたものであり、以下はその後に書き継がれたものであること

がわかる。

まず、この系図に記されていることから中心に、西岡家のあしあとをたどって見ることにしたい。

1 家のはじまり

系図の冒頭に

天穂日命十四世苗裔

出雲宿禰野見末

従五位下阿波守土師連宇庭男

とあり、菅原古人を始祖としている。従ってこの西岡家が菅原氏に出自を持つ家柄であることがわかる。菅原氏は野見宿禰を祖とし、もとは土師連を称したが、大和菅原の地（現在の奈良市菅原町）に移って後は菅原を名乗った。その後さらに大枝朝臣の姓を賜ったことは、『新撰姓氏録』（右京神別）に、

土師宿禰

天穂日命十二世孫可美乾飯根命之後也光仁天皇天應元年、改_ニ土師_一賜_ニ菅原氏_一。有_レ勅改賜_ニ大枝朝臣_一姓_一也。

とあることよって明らかである。この菅原氏は平安京の右京に居住した人びとであるが、山城国神別にも、

土師宿禰

天穂日命十四世孫野見宿禰之後也

と見えているから、山城国の各地に、土師宿禰あるいは菅原氏の一族が居住していたのであろう。

『尊卑分脈』の菅原氏の項を見ると、

天穂日命十四世孫野見宿禰垂仁天皇御代賜土師臣姓三世孫身臣仁徳天皇御世改賜土師連十一世孫古人等天平元年六月廿五日改賜菅原朝臣姓

とある。

系図では、古人以下、十五代目の良頼まで、『菅原系図』の諸本と同じ順位である。古人から三代目の「菅家」が菅原道真であることはいうまでもない。

ところで、西岡家のはじまりは、良頼の次「資朝」からで、以後代々「資」を名に冠している。

資朝 兵部丞

肇以西郊為氏矣、外祖掃部助総堯住城州西郊世為豪族因氏焉、男女各一人。男藏人総純継司家事、女諱幾子者給仕右京大夫良頼朝臣、蓋有年矣、幾子以姿色端麗容貌百儀、朝臣寵最深、而遂成妊身、是月朝臣病窮而薨、爰幾子未悟為妊身、有故還故郷、後果生男子、外叔総純名家の胤為養子、分産別家、名西郊、兵部丞資朝成人剛健、而嗜弓馬矣。

と記されているが、この記事は、西岡家のはじまりと、「西岡」の姓の由来を知る上において重要である。

西岡家は、はじめ「西郊」を以て姓としていた。これを「にしおか」と読んでいたのかどうかはわからないが、後に「西岡」と記すことから考えると、当初から「にしおか」であったと思われる。この「西郊」は、「城州西郊」とある通り、山城国の西郊であることはもちろんである。『紀伊國續風土記』に相良(薬)郡とあるのは誤りであろう。

平安京の西部、桂川を越えた現在の京都市西京区から向日市・長岡京市へかけての地域は、京都の西郊に当たり、広く「西岡」とよばれて来た。中世・近世の史料には「西岡」の名がさかんに使われている。

この西郊のどこかはわからないが、掃部助総堯と名乗る豪族が居住していた。「城州西郊世為豪族、因氏焉」とあるから「西郊」を姓としていたのであろう。総堯に二人の子があった。その一人は男子で総純と言ひ、家業を継いだ。いま一人は女子で幾子と言った。長じて菅原良頼の許に出仕したが、「姿色端麗容貌百儀」であることから良頼の寵愛を得た。そして妊娠したが、良頼はこの年に没し、幾子はそれを知らないまま、後に故あって故郷(実家)に還ったが、妊娠していることを知らなかった。その後男の子を出産した。叔父に当たる総純は、この男の子が名家、すなわち菅原良頼の落胤であることから、財産を分けて家を立て「西郊」と名づけたというのである。この男の子が西岡家の初代資朝である。

良頼は『尊卑分脈』によると、建治四年(三三二)の没で八十四才であったという。そうすると、幾子が寵愛を得たのは良頼の晩年八十四才と

いうことになるが、果たして子を妊ませることができたのであろうか。

2 南北朝の時代

初代資朝の子は定朝、その子が長頼である。系図には、

元弘初、後醍醐天皇潜幸于笠置寺之日、駈加官軍、貞和觀應之内數百功矣

文中、南軍八幡而南軍大敗之月於戰場討死

と記されている。長頼の弟に当たる方熙もまた南朝に加わり、同じく文和元年の八幡合戦において討死している。因みに、文和元年（二三三）は北朝年号で、南朝年号では正平七年に当たる。

長頼の子長基とその弟直頼は、「住于吉野繼于仕南朝」とあるから、吉野にあって、おそらく後村上天皇に仕えたのであろう。長基の子資基もまた南朝に仕えたが、南北朝和平之後紀伊国岡田庄に住したという。南北朝の合一は北朝年号では明德三年（三六三）、南朝年号では元中九年のことであった。

3 岡田村の草創

山城国の西郊を本貫の地とした西岡家は、南北朝の動乱期に南朝方の武将として活躍し、長基とその子資基の代には吉野の皇居に勤仕した。そして、紀伊国岡田庄に住したのは、資基の代からという。系図には、

伍候、南朝明德中南北和平之後居紀伊国岡田庄

と記されているだけであるが、吉野から紀ノ川を下った岡田の地に住したのは、南朝に仕えた功勞として岡田の地が与えられたことによるのかも知れない。

資基の子資光は、系図に、

永享中、草創菅靈廟於同莊之内祭之

とある。すなわち、菅原道真をまつる菅靈廟を氏神として創祀したことが知られる。それは、永享年間（四元〇四）のことであった。

4 雑賀衆と共に

和歌浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして田鶴啼きわたる

万葉の歌人山辺赤人が、その美しい風光をたたえた和歌浦は、古くから名勝として人びとに知られて来た。また、この和歌浦の一角にある雑賀の地は、中世から近世にかけて、ある意味では日本の歴史を動かした「雑賀衆」の拠点としても知られている。

紀ノ川が大阪湾にそそぐところに形成したデルタ地帯は、古代から豊かな生産地としてさかえて来た。そして、ここに雑賀荘が成立したのは中世末とされている。この雑賀荘を拠点とする土豪・国人層が、いわゆる「雑賀衆」として、強大な武力と、瀬戸内海を前面にひかえる要衝の地を扼し、大坂石山本願寺をささえていたのである。

天下の統一を企図した織田信長が、その目的を達成するためには、一向宗門徒の背後にある石山本願寺の征服が必要であったが、その前に、この石山本願寺の背後を支える紀州征討が不可欠の要件であった。元龜元年（一五七〇）から天正八年（一五八〇）にかけての石山合戦はその興亡を決するできごとであったが、雑賀衆が活躍したのは、まさにこの時のことであった。

『西岡家系図』には、雑賀衆と共に戦った資村のことが記されている。

資村 左衛門太郎

元龜天正中呼応鈴木重幸之催入本願寺數百誉矣。同十三年根来寺焼却之日於泉州千石堀戦死。

とある。この時、資愛・資綱の二人の弟も、共に千石堀で討死したことが知られる。

ここに見える鈴木重幸は、雑賀衆の棟梁鈴木孫市のことであり、その呼びかけに応じて、西岡家の当主であった資村は奮戦した。この資村のことについては、『紀伊國續風土記』の記事をもとに、貴志康親氏がその著『雑賀党物語』（昭和五二年、国書刊行会）に紹介されている。

ところで、石山合戦に際して、雑賀衆の動向と共に、紀州勢の強力なバックとなったのが根来寺である。もとの那賀郡上岩出村、現在の岩出町にあるこの寺は、正しくは大傳法院といい、高野山の僧覺鑊によって草創された古刹である。中世には、この寺の僧兵は強力な武力を持っていたが、雑賀衆と共に織田信長・豊臣秀吉の勢力に対抗した。

さて、石山合戦、信長・秀吉による紀州攻略の経過については諸書にゆずるが、資村が泉州千石堀（現在岸和田市）で討死した時、子供の資勝

中世の土豪と村

は二才であったという。系図中の資勝の記事はとくにくわしく、岡田村における西岡家の地歩がこのころから固まっていたことを物語っている。すなわち、

資勝 弥三郎

二歳之時、父資村討死成孤、依外叔湯浅三郎兵衛勝成之扶助成長、以耕為業、爰先祖資光所草創菅靈廟、去天正中為兵火成灰燼、於是慶長中資勝再就舊跡造營、以祭之、永使子孫為氏神、崇敬之。但十分之一小社也

同年中同庄鎮守白山権現、舟津明神、去天正中兵火成灰燼、是以興再、人数三十余人同志以資勝為魁首、再就舊跡造營之、是以西岡之氏族、永世可為座頭之筋目、其濫觴昭然蓋如斯矣とある。

西岡家が岡田の地に住したのは、この系図によれば既に記したように、南北朝合一後のことであった。その後、元龜・天正年間の、石山本願寺をめぐる争いに雑賀衆と共に奮戦した。おそらくこれが原因となって岡田村は兵火に罹ったのである。岡田村ばかりでなく、雑賀衆に加わり、あるいは根来寺の僧徒に組した紀ノ川筋の村々は同じように戦火による災厄を蒙ったものと思われる。

西岡家にあつて、この兵乱の後の当主は資勝である。それまで武士であったこの一族はこの時から帰農して、「以耕為業」とした。そして、先祖の資光が草創した祖神菅原道真を祀る菅靈廟が兵火に罹っていたのを、慶長年間に再興したのである。但しその規模は十分の一であったという。資勝は、この時岡田庄の鎮守である白山権現と舟津明神も同じく再興した。

この舟津明神は、『紀伊國續風土記』に、

○船津大明神社 境内除地

村の坤にあり、祀る神詳ならず。一村の産土神なり。村民相傳ふ、鎌倉より八幡宮の神體流れ来て此所にいます。故に船津八幡といひ習はせり。昔は回廊・舞台・參所・寶藏・御供所等あり、社頭も十七町ありしと寛文記に出たり。近き頃まで神宮寺もありしに寶曆十四年より廢絶すといへり。

と記されている。菅靈廟は西岡家の祀るところのものであり、この舟津明神社が岡田庄の氏神であったと考えられる。ところで、系図の記事の

中で注意すべきことは、資勝の再興に当たって、「人数三十余人同志以資勝為魁首、再就舊跡造營之」とあることで、この再興事業が西岡資勝を魁首として行なわれたことである。さらに、「是以西岡之氏族、永世可為座頭之筋目」とあることに注目しなければならない。短かい文言であるが、舟津明神の宮座を運営する座頭として西岡家が存在したことである。宮座の座頭、すなわち舟津明神を祀る主権が西岡家にあったのであり、このことは岡田という一村落の村立てが西岡家を中心として行なわれたことを物語っているのである。この舟津明神の祠は、現在も岡田に所在している。

西岡家と深いかわりのある菅霊廟と舟津明神社について記した序に、寺院のことについて触れておこう。

西岡家歴代の墓碑のある菩提寺は、岡田の東はずれにある安楽寺である。現在では本堂・庫裡がわずかに建っただけの小庵であるが、『紀伊國續風土記』に記されている次の伝承は重要である。

○安楽寺

眞言宗新義根來寺末

村中にあり、境内に天満宮及白山権現小現小社あり。當寺開基年月詳ならず。古は諸伽藍多く有しに天正の兵火に罹りて縁起資財等まで皆灰燼となれり。今も堂塔の礎石田地の中に遺れり。寛文記に古境内に海士部アマベの梅といふ古木あり。此は菅原神筑前ツマ太宰府安楽寺より梅の小枝を杖につかせられ此地に來り給ひて挿置給へるか生茂せし名木なりと聞きて御室の御所此事を聞し召れ、此所に尋ね來り給ふ事ありと見えたり。此等に因りて考ふるに、境内に在す天満宮は筑紫より勸請し奉りたる菅神にて、梅の木も其時に筑紫より移し栽ゑたる木なるべし。然れば即菅廟の別當寺にて筑紫の名によりて名つくるなり。然るに後世その本末を倒置して安楽寺となして菅廟を寺内の鎮守の如くなし來れるならん。天正の災後かく古の姿を失ひしなるべし。

まず、注意しなければならないことは、この安楽寺の境内に天満宮と白山権現社が存在したことである。西岡家が創祀した菅霊廟、資勝が天正の兵火の後に再興したという白山権現社の所在については触れなかったが、現在の安楽寺の境内には存在していない。それは、おそらく明治初年の神仏分離によって、氏神である舟津明神社に合祀されたか、廢社となったのであろうが、これについては未だ十分調査をしていない。記して後考に備えたい。ただ、この記事によって、『西岡家系圖』に見える菅霊廟が、かつて安楽寺の境内に所在したことが推定できる。そして『紀伊國續風土記』の推察のように、安楽寺がその別當寺であったと考えることもできるが、これらのことについての考察は今後の課題として

おきたい。

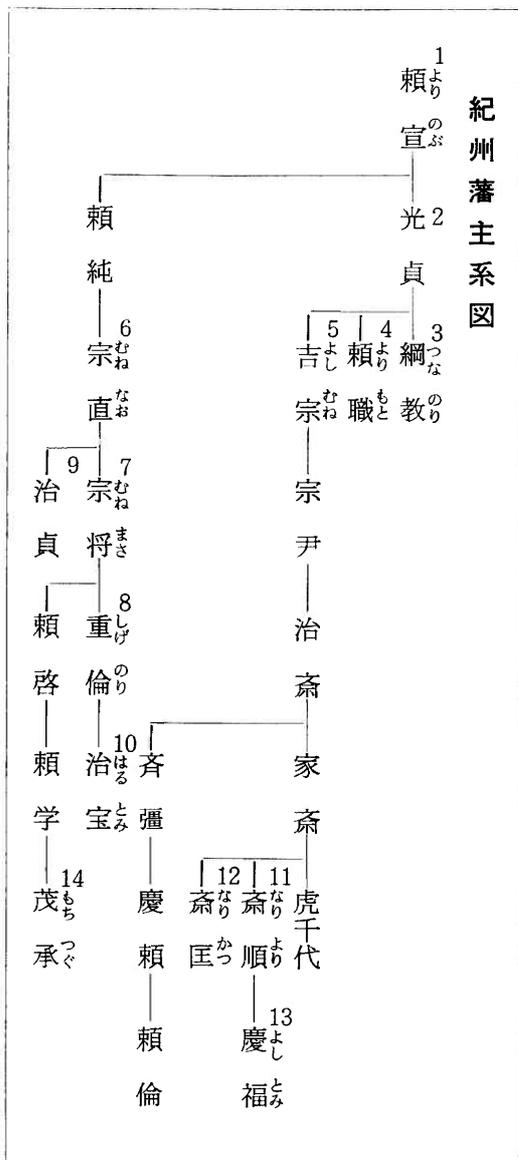
次に、この安楽寺という名称について見ると、西岡家が祖先として仰ぐ菅原道真との関係が考えられるのである。

福岡県太宰府町に所在する大宰府は、豊かな自然の中に多くの遺跡をのこす西海道の本都であるが、この大宰府といえは、すぐ想起するのが天満宮である。平安時代の中ごろ、延喜元年（九〇二）大宰権帥に左遷された菅原道真は、延喜三年（九〇三）五十九才の生涯を閉じたが、その遺体は今日の天満宮の境内に埋葬された。門弟の味酒安行は延喜五年にここに祠廟を建立したが、これが天満宮のはじまりである。後、さらに延喜十九年（九二〇）、勅命によって祠堂が建立され天満宮安楽寺あるいは安楽寺とよばれた。

こうしたゆかりから、菅原氏を祖とする西岡家が、自らの住地に創立した寺院を「安楽寺」としたのであろう。風土記に「堂塔の礎石田地の中に遺れり」とあるから、もとはかなりの規模を有した寺院であったことが推定される。

5 紀州藩の家臣

徳川幕府三親藩の一つとして、徳川家康の子頼宣（南龍公）が紀伊国に封ぜられたのは元和五年（一六二〇）のことであった。



岡田村の菅公廟を再興し、西岡家の基礎を築いた資勝の子資氏から、西岡家も徳川幕府の治世を迎えることになり、藩主頼宣の家臣として藩政・村政に携わることになった。例によって系図の記事を見よう。

資氏 茂右衛門

慶安三寅年、南龍院殿、岩出御殿江被焉成候之砌、於岡田嶋雲雀狩、被為成候日茂左衛門資氏、庄屋役相勤之故、御用被仰付、於御狩野、御目見難有御意戴之。

とある。ここに見える岩出御殿は、紀州藩によってつくられた別荘で、『南紀徳川史』卷一六九におさめられている「城郭邸園誌」にくわしいので引用する。

岩出御殿 那賀郡清水村

紀伊國續風土記に曰く御殿舊趾は村の巽にあり方一町の地なり紀ノ川の北岸に臨みて此地^{ナマツ}巖岩鳥帽子岩など名つけて兩崖に岩あり奇石怪巖南の方に突出し藍流東より來りて逆激奔注奇狀愛すへし四方の眺望最遠暢なり故に封初此地に別館を築き給ふ清溪公の時又増修す有徳大君公子にて在し時ここに住わせ給ふといへり後寶曆十四年撤毀せられ今は郡吏の舎を其跡に建つ西の川端に小竹の藪あるも今は公方様藪といふ巽の方に高き所松樹鬱鬱たるを妙見山といふ巖妙見堂ありしに御殿地となりし時此妙見堂を和歌浦に移し給ふ今養珠寺山の妙見堂是なり川を隔てて南の山を箱山といふ古へ覺鑿上人川の淵に法華經を藏めし時其經箱を埋めし所といふ松樹茂鬱にて遠望景佳なる故御殿の景色に入たれば御殿山ともいふ

(後略)

このように、岩出御殿は、紀ノ川の北岸、流れを取り込んだ景勝の地に設けられていた。初代頼宣の時代につくられ、清溪公(一代光貞)の時に修覆されたが、宝暦一四年(一七六四)に撤廃されたようである。その跡地は、明治時代に入って那賀郡役所の敷地として利用されたが、現在では学校敷地となっている。因みに、岩出御殿の一部は、大坂春日出新田会所の建物として利用されていたが、現在横浜市三溪園に移築されて現存している。

以下系図をたどると、次表のように代々が諸役を勤仕していることがわかる。

中世の土豪と村

中世の土豪と村

| 年号 | 西暦 | 当主名 | 役職 |
|------|------|-----|-------------------|
| 延享二年 | 一七四五 | 資盛 | 御蔵庄屋役 |
| 宝暦四年 | 一七五四 | 〃 | 同 退役 |
| 明和七年 | 一七七〇 | 〃 | 御金子御用被仰付、銀四十貫目奉献上 |
| 天明二年 | 一七八二 | 資豊 | 大殿様鶴御鷹野につき御本陣 |
| 〃 四年 | 一七八四 | 〃 | 御菓子奉之 |
| 寛政四年 | 一七九二 | 〃 | 庄屋役 |
| 〃 六年 | 一七九四 | 〃 | 御蔵庄屋役 |
| 〃 七年 | 一七九五 | 〃 | 庄屋役退役 |
| 〃 八年 | 一七九六 | 〃 | 御蔵庄屋役退役 |
| 〃 九年 | 一七九七 | 資信 | 鹿御用、帯刀仰付 |
| 享和元年 | 一八〇一 | 〃 | 庄屋役 |
| 〃 二年 | 一八〇二 | 〃 | 同 退役 |
| 〃 三年 | 一八〇三 | 〃 | 御馬見 |
| 文化四年 | 一八〇七 | 〃 | 作制道締方役、地士被仰付 |

このように紀州藩に仕えたのは、資氏をはじめとし、その後の三代をとばして資盛・資豊・資信の代、宝暦四年(一七五四)から文化四年(一八〇七)に及ぶ五十三年間である。

以上、『西岡家系図』を中心に、西岡家と岡田村の来歴をたどって来た。これだけの由緒を持つ家柄であるなら、さまざまの古文書をはじめとする史料がのこっていても不思議ではない。しかし、系図の資勝の項に、

凡先祖重代之家宝并歴代

之世家

南朝佐候之記録

天満宮草創之記録等悉

天正中為兵火焼失焉

と、天正の兵火で焼失した旨を記しているのは真実であろう。それにしても、それ以後、江戸時代に諸役をつとめたころの古文書があったに相違ない。私が確かめたところでは、主屋の改築に当たって焼却したということである。歴史に関心を持つ人がいなかったからとはいえ、残念でならない。

同じ資勝のところには、これにつづいてこの系図の成立の事情が記されている。天正の兵火ですべての記録を失ったが、

此一軸傳存母之懷中雖然

料紙損破而悉覽恐子孫

失家系矣是以資勝為子孫不

失家譜今也新模為之以傳

後代者也矣

とある。『西岡家系図』一卷は、こうした事情で、資勝の代にまずは整えられたのである。

四 村落史研究の視角

『西岡家系図』は、もと山城国を本貫の地とし、南北朝時代に故あって紀伊国那賀郡岡田の地に定住することになった西岡家の来歴を記したものである。そして、この岡田庄、のちの岡田村が西岡家と深いつながりがあり、おそらく中世土豪ということのできる西岡家によって開かれた村落であったと考えられるのである。

中世の土豪と村

このことは、三においてくわしく論証して来たが、少し角度をひろげて村落史研究という観点から眺めて見たい。まず、その前に系図を史料として扱ったことについて若干の説明を加えておきたい。

本来、系図は、一つの氏族または家の来歴を記したもので、その家の名譽のために記されたものであり、成立事情にもよるが、潤色が多く、近世にはさかんに偽系図がつくられたということもあって、その取扱いについては十分注意しなければならないことは常識である。しかし、系図の中に記されていることがらが、まったく創作であるというわけではなく、真実を伝える部分のあることも事実である。従って、これを史料として利用する場合には、厳密な検討を加え、史実と対照しながら、その中から真実の部分抽出することが公正なる研究態度であろう。⁽¹⁾

今回、本稿に『西岡家系図』を扱うに当たって、こうしたことを念頭におきながら考えを進めて来たが、西岡家の場合、家の成り立ちの項については疑問がないでもないが、南北朝以降の事項については、歴史的事実と対照して、また現地調査にもとづく所見を加えて、概ね真実が伝えられているように思われる。

先年、私は、瀧川政次郎博士の監修・指導の下に、大阪府枚岡市（現在東大阪市）の市史編さんに従事した。地元の旧家にかんがりの系図がこされていることから、瀧川博士の方針に従って、そのすべてを史料編に収録した。⁽²⁾ 系図を史料として扱い、系図をどのように研究するかという点については、この時に自ら体得することができた。今回の『西岡家系図』への関心もこの時以来のことであったかも知れない。また系図に記されていることがらが、単にその氏族あるいは家の来歴ばかりでなく村落史の研究に役立つ場合のあることも、その後いくつかの系図に接することによって体験して来た。

わが国の古代・中世の村落史研究は、荘園史・社会経済史の分野として行なわれ、全国各地域の村落を対象として数多くの業績がのこされている。また、民俗学や人文地理学の諸分野においても村落史の研究は重要な課題とされて来た。こうした場合、その方法としては、荘園にあっては、本所である寺社にのこされている古文書、中世・近世の地方史料を中心に研究が進められて来たことは当然である。しかし、全国に数多く存在する「村」が、そのすべてに古文書等の一等史料を伝存しているとは限らないのであり、むしろのこしている場合の方が例外であるというのが現状なのである。もっとも、史料をのこしている村落研究の成果が、一般の例として史料をのこしていない村の研究に役立つことは否めないが、古文書等の史料をのこしていない村についても、さまざまな方法を駆使して、その村の成立、発展、人びとの生活を考える努力が必要であろう。

こうした観点から、私がこれまでの調査経験を通じて知ることのできたいくつかの村の例を紹介して見たい。

1 河内国河内郡中新開村

東大阪市中新開の氏神としてまつられている諏訪神社には、「氏神三社興立記」と題する一通の古文書が伝えられている。⁽¹⁾

氏神三社興立記

大日本五畿内河内國河内郡奉勸請

諏訪大明神誠情之根本者吾先祖信

濃國諏原之住人諏訪連子孫數代相

續至吾吉盛于時國依動乱當地來耕

作倚心開新田名中新開村欲祭先祖

深源而建立三社奉勸請 中央諏訪

大明神左殿稻荷大明神右殿筑羽大

權現此三社即當村之氏神也專祈依

神擁護天下太平國土安穩五穀成

就無病無難我村民子孫咸永久繁昌

者是三社守護神德永可扇也我子孫

至末代迭祭禮獻供神務莫怠斯卷

傳我子々孫々為萬民抽丹誠令祈

念可為神務也矣

神主諏訪連吉盛(花押)

天文元壬辰年九月廿六日

中世の土豪と村

史料に見られる通り、戦国時代のさ中、天文元年（一五三二）という年に、信濃国諏原庄の住人であった諏訪連吉盛の一族が、この地に来て村を開き、諏訪の神を勧請したというのである。この人びとの故郷である諏原庄の所在は定かでないが、諏訪神は、長野県諏訪市と上諏訪町に鎮座する上・下二つの諏訪大社である。戦国時代には、上社と下社の抗争がつづき、下社をおさめていた上社は、天文十一年（一五四二）に武田信玄によってほろぼされ、信濃国は、甲斐・越後の両雄に挟まれることになったが、その制覇を決する川中島の戦いは弘治三年（一五五三）のことであった。⁽³⁾

こうした動乱の世の中に、故郷を去って遠く河内に移り住んだ人びとのあったことをこの史料から知ることができるが、当時の河内はどのような状況であったのだろうか。

河内国の中央には、巨大な潟湖が存在していた。古代の文献には「日下江」「難波潟」とよばれているが、地質学者によって、「河内湾↓河内潟↓河内湖」と命名され、その存在が実証されている。⁽⁴⁾ 中新開の集落はこの河内湖の東の岸辺に当たっているのである。この河内湖の汀線をとると、東南に当たる部分に、北から加納・中野・箕輪・横枕・本庄・新庄などの集落（いずれも現在東大阪市）が自然堤防上にならんでいることがわかる。その成立には時代の差はあるが、合わせて「六郷荘」とよばれていた。この中で、新庄は江戸時代初期の開発村であるが、加納は式内宇波神社の存在から開発の年次は古く、その他の集落はいずれも鎌倉・南北朝にさかのぼる。中新開の集落は、これらの集落よりやや東南の方向にあり、地形から見ると中世には湿地帯であったと思われる。こうした湿地帯が、戦国時代に、地方から出て来た人びとによって開発され、氏神を勧請して村立てが行なわれたのである。このことは、中世のこの地域が、地方出身の人びとによる開発を受容できる政治・経済的事情であったことを物語ると同時に、中世における村の成立の事情を示しているのである。

2 河内国河内郡四条村

生駒山地の西ろくには、いくつもの扇状地があり、その湧水点に原始・古代以来の集落が連亘している。四条村もその一つで、村の名称は古代の条里制に起因している。河内から大和へ越える道の一つ鳴川越道に面し、鎌倉・南北朝時代造立の地藏石仏をのこしている。⁽⁵⁾

この村の成立を示す古文書はまったくのこされていないが、近世に四条村とよばれた地域の垣内中^{かきうち}には「山畑」^{やまはた}、「畑小路」^{はたごち}、「空川」^{くわがわ}、「棚林」^{たなばやし}などがあり、中でも山畑がこの村の中でもっとも古く、四条の村はここからはじまったと伝承されている。さらにこの山畑の集落は、東方の山

中にあった大きい寺の坊の人びとが降りて来たという伝承のあることが重要である。

現在の東大阪市上四条町の東方山中には、先年旧枚岡市教育委員会で私が担当して発掘調査を行なった神感寺跡がある。東西六〇〇呎、南北五〇〇呎にひろがる寺域に十数棟の建築遺構を完全にのこし、国の史跡に指定されている。⁽⁶⁾この神感寺は、奈良時代の末に修行僧によって創立されたと考えられるが、鎌倉時代には真言宗の山寺として発展した。南北朝時代には南朝方の城寨として利用され、正平三年（二四八）の四条繩手の戦には、楠木正行が本陣をおいた往生院の背後を支える砦となったが、大和秋篠から生駒山の南に上った北軍に攻められ、砦が敗れると同時に伽藍は焼失した。その後、安南院とよばれる一院だけが室町時代まで命脈を保ったが、その後は廢墟となった。遺跡の調査によって主要伽藍の南がわに、おそらく参道に面していくつかの坊舎のあったことが知られているが、これらの坊舎は寺の衰退と共に四条の山腹に下り、坊舎を守っていた人びとによってはじめられたのが山畑の集落であったと考えられるのである。その後、村の発展によって、下方に向かって、畑小路、空川……というように峠道に沿って集落が拡大して行ったのであろう。そして村としての成立は、四条町の安養寺にのこされている方便法身尊像（阿弥陀如来画像）の示す年代のころと考えられる。この画像の裏書には次のように記されている。

大谷本願寺釋實如

方便法身尊像

永正七年庚申十二月五日

興正寺門徒河内國河内郡

平岡郷四条村惣道場也

すなわち、永正七年（二五〇）のころ、四条村は惣としての団結・成立を見たことが知られるのである。

3 河内国河内郡豊浦村

現在の東大阪市豊浦町・東豊浦町などの地域は、『倭名類聚抄』に見える河内郡豊浦郷に当たり、古代以来の集落であったと考えられる。近世の豊浦村につながるこの村の開発はやはり戦国時代にあることが、のち天領となったこの村を支配した代官中村家の系図によって知ることができる。⁽⁸⁾

この中村家は、中村代官の名があり、慶長十九年（二六五）、元和元年（二六六）の、いわゆる大坂冬・夏の陣に際して徳川家康の本陣となり、

中世の土豪と村

中世の土豪と村

のち豊浦村の庄屋として、暗越奈良街道と東高野街道の交わる要衝の地を支配することになった名家である。

中村家系図は、用紙十七葉の冊子で、表紙に「佐々貴鯨江家系」と記され、宇多天皇からはじまる、いわゆる佐々木源氏の一族である。宇多天皇から十七代目を高昌といい、近江国愛智郡鯨江城にあり、鯨江氏とよんだ。それから四代目の孫が中村唯正で、織田信長にほろぼされた後、河内国河内郡豊浦村に浪跡して姓を中村四郎右衛門と号した。豊浦に来た理由は不明としているが、この地域の開発が主眼であったのである。唯正の没したのは天文二年（一五三三）であるから、河内に来たのは、それに先立つころである。系図には、

中村唯正

本名鯨江兵庫助唯正天文二癸巳正月廿五日卒法名唯順江州江々木ノ一族ニシテ元祖鯨江高昌ヨリ四代ノ孫也ト母ハ姓氏不詳唯正曾テ河州河内郡豊浦村ニ浪跡姓名変シテ中邑四郎右衛門ト号ス其故ヲ知ラス

（後略）

と記されている。

豊浦村のほか、河内には河内郡吉原村（東大阪市吉原）が近江から来た人びとによって開かれたといい、若江郡長田村（東大阪市長田）も、氏神長田神社の宮寺であった摂取庵の本尊地藏菩薩像の縁起によって近江から来た人びとによる開発村らしいことが知られるのである。

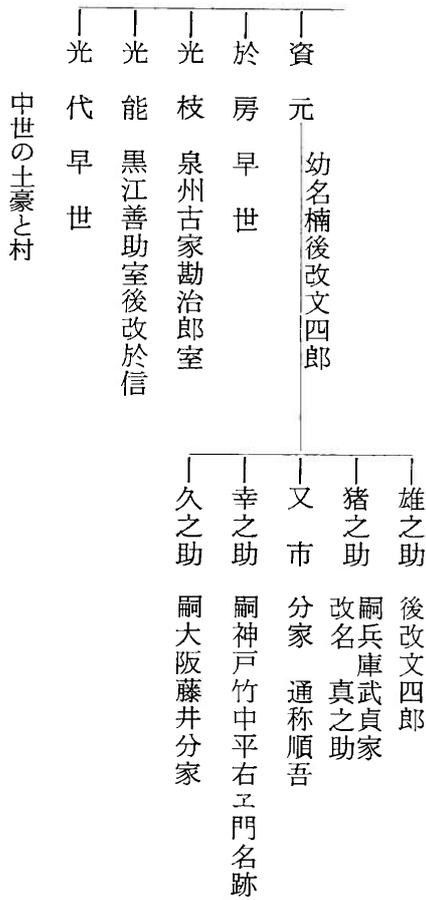
以上、河内国における二、三の例によって、中世における村落の成立を考えて見たが、1の中新開村は氏神諏訪神社にのこされていた一通の古文書を史料とした。2の四条村の場合は、地域にのこされている伝承と、考古学的調査によって明らかになっている寺院跡、さらに、かつて村の惣道場であった真宗寺院にのこされている阿弥陀如来画像の存在によって、さらに3の豊浦村は土豪中村家の系図によって、それぞれの村の成立を考えて見た。いずれの村をとって見ても、村の成立・発展のあとを具体的に書き留めた古文書がのこされているわけではないが、地域にのこされているさまざまな文化財を史料として活用することによって、各村の歴史を解明して行くことができるのであり、現在さかんにその必要が主張され、各地で実践されている地域文化財の保存の意義も、そこに見出すことができるのである。

(1) 太田 亮博士『家系系図の入門』（人物往来社、昭和四二年）等参照

- (2) 『枚岡市史』第三卷史料編一（昭和四一年）、第二部記録・文書史料、第五類諸家系譜、及び『枚岡市史』第四卷史料編二（昭和四一年）、一四 家関係史料にそれぞれ収録されている。
- (3) 昭和四十三年、近畿大学の櫻井敏雄氏と共に東大阪地域の社寺建築調査を行なった際発見した史料である。中新開の諏訪神社本殿は、この調査の結果室町時代の様式を伝える古建築であることがわかり、文書に記されている伝承を裏付けることになった。現在この社殿と文書は、『東大阪市文化財保護条例』により有形文化財に指定されている。
- (3) 藤森栄一氏『諏訪大社』（中央公論美術出版、昭和四二年）
- (4) 梶山彦太郎・市原 実氏「大阪平野の発達史―14C年代データから見た―」（『地質学論集』第七号、昭和四六年）
- (5) 『河内四糸史』第二冊史料編Ⅰ（四糸史編さん委員会、昭和五二年）参照
- (6) 枚岡市教育委員会『河州神感寺跡の調査』、同『河州神感寺跡の調査Ⅱ』（昭和三九・四〇年）
- (7) 藤井直正「榎蔵山寺の創立」（『枚岡市史』第一巻本編、昭和四二年）所収
- (8) 『枚岡市史』第四卷史料編Ⅱ、一四 家関係史料（昭和四一年）所収

あとがき

紀伊国那賀郡岡田村は、私にとって有縁の地である。それは、この岡田村が、私の父順治と祖父久之助二人の故郷であるからである。そして、私の父と祖父は、ともに西岡家の出身である。明治の代に継ぎ足された系図の末尾に近い部分に、



とある。この資元の子には五人の男子があり、長男雄之助が家督をつぎ、三男又市が岡田村に分家を持ち、あと三人のうち、次男猪之助は兵庫の武貞家に、四男幸之助が神戸の竹中家に、そして五男の久之助は大阪藤井家の分家の一つを、それぞれ養子として嗣いだのである。

私の父順治は、岡田で分家した又市の次男であり、久之助は祖父に当たる。父順治は、大阪市西区靱で商業を営んでいた叔父久之助のところへ養子に来たのである。

こうした因縁で、子供のころから、祖父・父の故郷、岡田の西岡家が古い家柄であることを父母から聞かされていた。父がこの世を去ったのは昭和四十九年八月三十日のことであったが、その後、ふとしたことがきっかけで、私自身先祖の系図に遭遇することになった。

私は、現在東大阪市四条地区の歴史をまとめる『河内四条史』の編さんに携わっているが、四で紹介した神感寺に関係のある古文書一通が、かつて和歌山市雑賀庄にあった性應寺しょうおうじに所蔵されていたことから、この性應寺のことについて知りたいと思い、和歌山県立博物館をたずねた。そして、『紀伊國續風土記』を見ていたが、何気なく那賀郡岡田村の項を開くと、西岡家のことが書いてあるのに驚喜したのである。その文中にある「家傳」が気にかかり、西岡の本家を訪ねて拝見したいと念願していた。そして、父の三回忌をすました昨昭和五十一年九月二十三日彼岸の中日に、先祖の墓参を合わせて岡田に赴き、この系図に接することができた。

菅原氏を先祖としていことはもとより、私がかもっと驚いたことは、自分の先祖が南朝の武将として活躍をしていることである。過去十数年間をふりかえって見ると、昭和三九・四〇年には、今の自宅から仰ぎ見る神感寺跡の発掘調査を行なう機会にめぐまれた。先にも記したように四条繩手の戦の砦である。さらに枚岡市史編さんの際には、河内一の宮枚岡神社の社家であり、典型的な中世土豪として学界に知られている水走氏みずまのご子孫と、『水走文書』の原本をつきとめたことがある。この水走氏も、系図によって南朝方であったことが知られるのである。さらに四条繩手の合戦ゆかりの四条地区の歴史『河内四条史』と、楠木正行の陣であった往生院の『往生院史』の編さん等、これまでやって来た仕事、現在やっている仕事が南朝につながっているのである。

もう一つ、わが大手前女子大学には野見宿禰にゆかりのある古墳がある。これについては本論集第一号に載せられている理事長の一文に詳しいが、奇しい因縁を思わずにおられない。

それはともかく、この拙ない一文を歴代の先祖の霊に捧げると共に、亡き父の冥福を祈りたいと思う。

天穗日命十四世苗裔

出雲宿禰野見末

從五位下阿波守土師連宇庭男

從五位下治部卿

菅原古人

遠江介

從三位式部卿文章博士

清公

幡摩守

從三位參議刑部卿

是善

文章博士

伊像 備前 幡摩守

長者 文章博士 勘解由長官

菅家

參議 右大弁 中宮大夫

從二位 右大臣 右大將

贈正一位 左大臣 贈太政大臣

左大弁 從五位下 大學頭

高視

從四位上 左少弁 文章博士

雅視

山城 肥後守

從四位下 大學頭 文章博士

資忠

和泉 周防 因幡 淡路守

常陸 上總介 從四位下

孝標

從四位上 彈正少弼 大學頭

定義

長者 文章博士 和泉守

藏人所雜色

輔方

從五位下 内少記

是基

豐前權守

正四位下 長者 文章博士

在茂

大学頭

從二位 長者 兵部卿

在高

大学頭

長者 刑部卿 從三位

淳高

右京大夫 豐前守

良賴

兵部丞

資朝

肇以西郊為氏矣外祖掃部助

總堯住城州西郊世為豪族

因氏焉男女各一人男藏人總

純繼司家事女諱幾子者

給任右京大夫良賴朝臣蓋

有年矣幾子以姿色端麗容

貌百儀朝臣竈最深而遂成

姪身是月朝臣病窮而薨爰

幾子未悟為姪身有故還故鄉

後果生男子外叔總純称名家

之胤為養子分產別家名西郊

兵部丞資賴成人剛健而嗜

弓馬矣

民部助

定賴

| | |
|--|--|
| <p>直頼 左京進</p> <p>南朝</p> <p>長基 住于吉野繼子仕</p> <p>兵庫助</p> | <p>長頼 兵部助 左衛門佐</p> <p>元弘初</p> <p>後醍醐天皇潛幸于笠置寺之日駈加于官軍</p> <p>貞和觀應之門數百功矣</p> <p>文和中</p> <p>南君軍御八幡而南軍大敗之日於戰場討死</p> <p>長熙 掃部助</p> <p>方熙 東市正</p> <p>伍候于</p> <p>南朝</p> <p>文和中八幡合戰之日打死</p> |
|--|--|

| | | |
|----------------------------|--|--|
| <p>光方 右近</p> <p>光規 與四郎</p> | <p>資良 孫七郎</p> <p>菅靈廟於同莊之內祭之</p> <p>資光 永享中草創</p> <p>菅四郎</p> | <p>資基 造酒差 大学</p> <p>南朝</p> <p>伍候</p> <p>南朝</p> <p>明徳中</p> <p>南北和平之後居</p> <p>紀伊国岡田庄</p> |
|----------------------------|--|--|

女
宮本肥後守名跡
名豊前守政基
熱田伊賀守氏康室

資方
孫四郎

實孫七郎資良二男
光規無子故為養子

左近 右衛門

資兼
雅榮助

資繼
隅田又左衛門名跡
名又八郎忠茂
土橋治郎太夫吉政室

女
左近太郎

資康
左馬五郎

資國
堀新左衛門名跡名堀新助

資高
左衛門太夫

資用
刑部二郎 別家

資美
彦五郎 早世

女
志摩源五左衛門信允室

資村
左衛門太郎

元龜天正中應鈴木重幸
之催入本願寺數百營矣
同十三年根來寺燒却之日
於泉州千石堀戰死

資愛
三郎

天正中於泉州千石堀討死

五郎

資綱

天正中資愛同日戰死

山田弥次兵衛氏常室

女

弥三郎

資勝

二歲之時父資村討死成孤

依外叔湯淺三郎兵衛勝成之

扶助成長以耕為業爰先祖

資光所草創

菅靈廟去

天正中為兵火成灰燼於是

慶長中資勝再就舊跡造

營以祭之永使子孫為氏神崇

敬之但十分之一之小社也

同年中同庄鎮守

白山權現

舟津明神去

天正中兵火成灰燼是以

興再人數三十四人同志以

資勝為魁首再就舊跡造

營之是以西岡之氏族永世

可為座頭之筋目其濫觴

昭然蓋如斯矣

几先祖重代之家宝并歷代

之世家

南朝伍候之記錄

天滿宮草創之記錄等悉

天正中為兵火燒失焉土于

此一軸傳存母之懷中雖然

料紙損破而不悉覽恐子孫

失家系矣是以資勝為子孫使不

失家譜今也新橫為之以傳

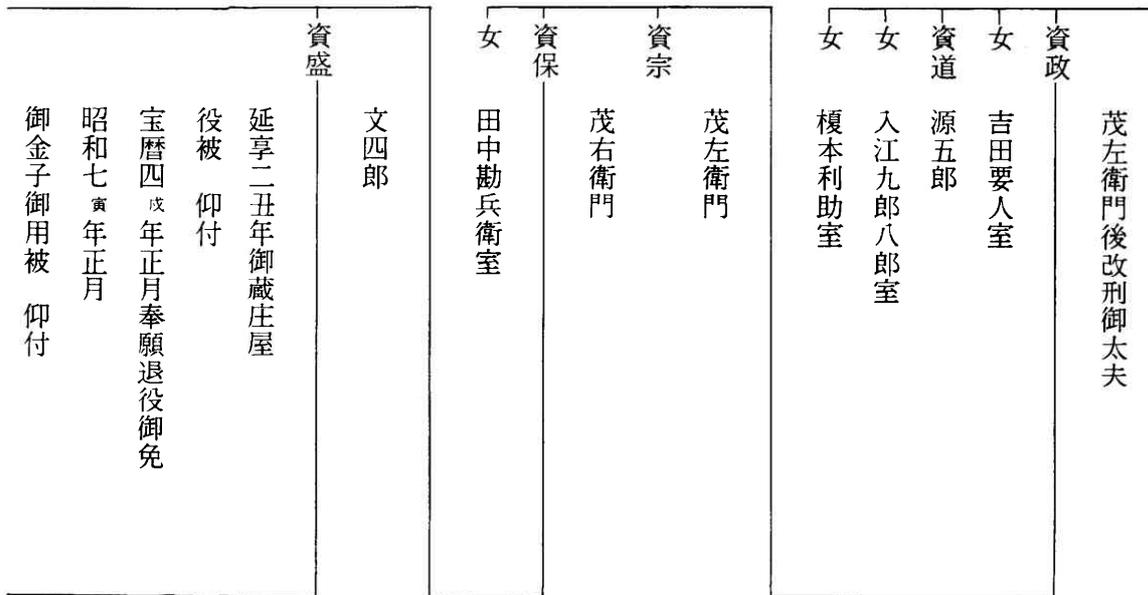
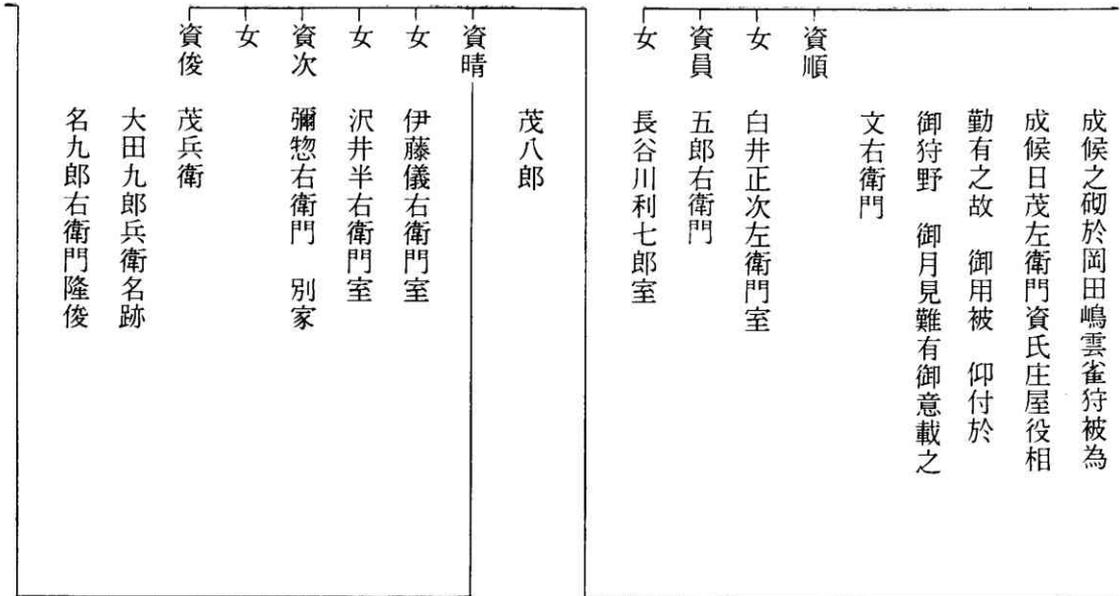
後代者也矣

茂右衛門

資氏

慶安三寅年

南龍院殿岩出 御殿江被焉



銀四十貫目奉献上

女

資持

女

資種

女

女 同姓常八郎室

文四郎後改久太夫

資豊

天明二壬寅年正月十五日

大殿様 御鷹野被為

成候之日為 御本陣

被為 成 御目見被

仰付 御金子戴之

同四甲辰年壬戌正月十五日

同前 但熨計御菓子奉

之

寛政四壬子年十一月庄屋役

被 仰付

同六甲寅年九月御藏庄

屋役被付

同七乙卯年奉願庄屋退役

蒙 御免

同十戊午年奉願御藏庄屋

後蒙退役 御免

根來光福院室

資尚 浅八郎別家

女 安井五兵衛室

資昌 銀藏 別家

資雄 文治

相続西本半八名跡

女 久野近江守家人松本称八郎室

女 松屋喜兵衛 室

文四郎 後改茂左衛門

資信

寛政九丁巳年十一月十二日

且鹿御用被 仰付帶刀

蒙 御免

享和元^{辛酉}年七月廿日

庄屋役被 仰付

同二^{壬戌}年奉願退役御免

同三^{癸亥}年九月十七日在

御馬見被 仰付

文化四^{丁卯}年六月九日作

制道締方役被 仰付

同年十月十七日肥土被

仰付

勝二郎

資清

嗣淺八郎資尚名跡

相左衛門 別家

資貞

資成

嗣大林孝祐名跡雖然
有故不改族

(以下省略)

中世の土蒙と村

大徳日命十四世苗裔
出雲角福野見末
遷居下所賀寺土師蓮平摩房
菅原真人 遷居下所賀寺
増公 遷居天孫御孫孫孫
光基 遷居三本取利神御
菅原 遷居三本取利神御
高橋 遷居三本取利神御
雅規 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御

資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御

資光 菅四郎
資光 菅四郎

資忠 遷居三本取利神御
資忠 遷居三本取利神御

第2図 西岡家系図